

じょうこうじ

掟光寺だより

行事案内

●2月5日(月)
「お日待ち講」

13時30分から



数え年?・満年齢?

「お年はいくつですか?」

こう聞かれて答える時はほとんどの方が満年齢だと思えます。満年齢とは「生まれたときを0歳とし、誕生日を迎えるごとに1歳増えていく」という考え方です。

一方で数え年はあまり馴染みがない方もいるのではないのでしょうか。神社やお寺に行く時ぐら

令和6年
2月号

見かけるもしくは聞く程度。今年が厄年でお祓いを頼む時や、七五三や還暦の時、あとは亡くなった人のお歳を数える時ぐらいでしょうか。この数え年とは「生まれたときを1歳と数え、正月が来ると1歳増えていく」という考え方です。満年齢とは全然違う数え方ですね。なぜこのような2つの数え方があるのでしょうか。



数え年は日本古来から使われてきた数え方です。数え年の「生まれたときを1歳」と数えるのは、諸説ありますが、有名なのは数える起点が「お母さんのおなかの中にいのちが宿った時」と考える説です。また、「正月が来ると1歳増えていく」という考え方は、正月を迎えると年神さまが人々に歳を授けるためにやってきて、各家を訪れると考えられてきたため

す。そのため、年神さまを迎えるために大掃除をして、目印に門松を飾り、おせち料理をつくり、お正月は年神さまを迎える大事な行事でした。

一休宗純(一休さん)の有名な歌に「正月や冥途の旅の一里塚めでたくもありめでたくもなし」(めでたい門松もそれを立てるたびに年を重ねるから、次第に死に近づく目印のようなもの。めでたいものでもあるが、めでたくないものでもある)とあるように、お正月に1歳増えていく数え年は身近であったことが伺えます。



明治時代になると西洋文化の影響から「満年齢」に統一しようとして政府は動き出そうとしました。しかし、この時はなかなか満年齢が浸透せず、従来の数え年を使い続けたそうです。結局、満年齢を使うようになったのは戦後の1950年に公共機関などではすべて満年齢で数える法律ができてからでした。そこから段々と満年齢が浸透し始め現在に至るといわけ

この数え年は世界で見ると日本や中国、朝鮮半島、ベトナムなどの東アジアで一般的に使われていたそうですが、現在では満年齢が一般的になっています。唯一、韓国だけが近年まで使われていたが、昨年2023年に数え年から満年齢に変わりました。この時は韓国国民全員が1〜2歳若返ったということでもニュースになりましたね。



近年では日本古来の文化(お正月やお盆)をしないご家庭や神社仏閣に関わりを持たないご家庭も増えてきており、なかなか数え年に馴染みがない方もいらっしゃると思います。私もお葬儀からご縁のお宅にはケースバイケースですが混乱を避けるために満年齢でお位牌を書くこともあります。満年齢は非常に分かりやすいですが、数え年の裏にある日本文化やいのちに対する死生観も一緒に失われていくのは少し寂しいものですね。

